

住友金属工業株式会社 2009 年度第 3 四半期決算説明会
(2010 年 2 月 3 日開催) 質疑応答の概要

説明会出席者 専務執行役員 石塚 由成
経理部長 加藤 聖二
広報・I R 部長 増田 信昭
I R グループ長 星 正人

(業績動向に関して)

Q 1) 収益状況については想定通りで進展しているのか？

A 1) 下期の販売状況は、自動車向けが好調である一方で、国内建材向けが悪化しましたが、全体としては予定通りに進捗しております。
一過性要因の、四半期の間での入り繰りはありますが、通期としては前回から業績見通しの変更はありません。

Q 2) 一過性要因が、2Q△160 億円から 3Q△260 億円といったん増加しているのはなぜか？

A 2) 評価損益に含まれる原価差額調整計算の影響です。一過性要因全体としては、徐々に縮小していく傾向となります。

Q 3) 一過性要因のカンパニー別の影響を計算する際は、カンパニーの粗鋼生産比で配分するようなイメージで良いか？

A 3) 大まかにはそのようなイメージで良いと思います。

Q 4) 08 年度から 09 年度見通しの営業利益増減要因のうち、「販売価格等」が、前回よりも 30 億円悪化しているがこの要因は？

A 4) 建材分野等の市況品の価格悪化が主因です。

Q 5) 販売量の増加が高炉他社に比べて鈍いように見えるが？

A 5) 当社の販売には、アライアンス先へのスラブの比率が大きく 20%程度ありますが、これは販売量を安定にしておりますので、他社に比べて元々販売数量の落ち込みが少なかった分、増え方も小さいということだと考えています。

(鋼管事業に関して)

Q 6) シームレスパイプの販売量見通しを微修正しているようだが？

A 6) 期末に近づき、予測の精度を上げたところです。緩やかな回復基調というトレンドに変更はありません。

Q 7) スーパーハイエンド品の販売量見通しを下げた要因は？

A 7) 耐サワー鋼について、想定したオーダーが入らなかったことによります。

Q 8) シームレスパイプの品種別の状況につき詳しく説明してほしい。

A 8) 油井管については、需要環境の好転に伴い、受注量も回復傾向となっています。長期契約分の価格改定交渉はまだこれからという状況です。
ラインパイプについては、店売り在庫の適正化の進行に伴った回復途上です。
ボイラチューブに関しては、火力発電所向け需要については弱い状況が継続していますが、原子力発電所向けについては、引続きフル生産を継続しております。
国内向けの自動車、建機向け等のメカニカル鋼管については、在庫調整の進展により販売量は増加傾向となっています。

Q 9) シームレスパイプの価格のボトムは？

A 9) この下期が価格のボトムになるであろうと考えています。

Q 10) シームレスパイプ需給への中国製品の影響について、現在の状況と今後の見通しを教えてください。

A 10) 当社のシームレスパイプは中国品とはグレードが異なる高級品のため、直接影響を受けることは無いと考えています。
但し、世界のシームレスパイプ市況全体の攪乱要因にはなっており、そのような間接的な影響はあります。

Q 11) 鋼管カンパニーの営業利益内訳は？

A 11) 鋼管事業は3Qが▲30億円、4Q見通しが50億円で、通期では150億円。
スラブ事業は、3Qが▲30億円、4Q見通しがトントンで、通期では▲200億円と見通しております。

Q 12) シームレスパイプの収益トレンドについて説明してほしい。

A 12) 2Qから3Qにかけては、販売価格の悪化が主因で収益が悪化しています。
3Qから4Qについては、ハイエンド品の販売量増加に伴う販売構成の好転と販売数量の増加が好転要因です。

Q 1 3) 来年度稼働のブラジルでのシームレスパイプ事業は、稼働初年度についてはマイナス影響となるのか？

A 1 3) 2010年度の収益影響差はほとんど無いと考えてよいと思います。製鉄所の立ち上げコストについては、現在も従業員のトレーニング等で既に発生しておりますので、急に管理コストが増加するという訳ではありません。

Q 1 4) ブラジルでの販売先として、どのような顧客を考えているのか？

A 1 4) 現在の販売構成は、製造能力の関係からメジャーオイル等の長期契約顧客が主体ですが、ブラジル新ミル完成による能力増加を踏まえて、現在、国営石油会社や独立系石油会社等への技術プレゼンテーションによるアプローチを強化しています。将来このような新規顧客への販売量が増加すれば長期契約比率は現在よりは減少していくことになると思います。

(その他)

Q 1 5) 2010年度は、日本の厚板の主要輸出先である韓国での自国内生産増加の影響により、日本の厚板販売量の減少が予想されている。一方で、厚板を母材とする溶接大径鋼管の需給は急速に改善していると聞く。
住金の厚板ミルはフル操業を継続可能か？

A 1 5) 当社の厚板輸出先との関係は非常に強固なものでもありますので、韓国内の能力増強の影響については、余りご心配いただく必要は無いと思います。
一方で、当社でも先日、ヨーロッパの Nord Stream パイプライン向け大径管の受注について発表しておりますが、ご指摘のように、大径管については来年度に向けて、かなりの需要増加が想定されます。
このような中、2010年度につきましては、超高強度ラインパイプ増産体制の年度末稼働に向けた工事も推進していきます。
厚板と大径管の生産配分については現在検討中ですが、いずれにせよ、厚板ミルについてはフル稼働を継続できるものと考えております。

Q 1 6) 2010年度の事業投資・設備投資・減価償却の方向性は？

A 1 6) 設備投資については、今年度見通しの1,380億円を超えることはないと考えています。事業投資についても、ブラジルの新ミルが10年年央に立ち上がるため、減少します。減価償却については若干の増加を見ています。
このような状況から借入残高については、来年度は減少すると考えています。

以上